

リア充育成塾

仙台コミュニケーションアート専門学校
クリエイティブコミュニケーション科
ライトノベル・小説作家専攻
一年
熊谷まりな

美人は三日で飽きるけどブスは三日で慣れる、なんて言葉がある。
しかし俺、小金森悠太は断言する。嘘だ。そんな訳あるか。自分を棚に上げておいて何だが付き合うなら美人がいいに決まってるだろ。
特に高校生なんてのは恋愛する上で最も必要なのはルックスだ。
相手に求めるもの、それは一に顔、二にバスト、三に太もも、四にくびれで五に性格。
ところがまあ特に美男子でもイケメンでもない俺は彼女なんかはいないわけで。
でも相談は受ける方だぞ。例えば今日だってクラスで三番目に可愛い子に恋愛相談を受けたし。
「〇〇君って好きな人いるのかな？」
その〇〇君がクラス一のイケメンというのは知らない。
けどだから人俺をリア充だと思っている。
さらには周りには「いや俺モテるし」とか、「彼女他校にいるよ」なんて見栄張ってるおかげで辺りをきょろきょろと見回す不審者だ。
もし一人の姿を見られたりしたら恥かしさは尋常じゃない。
夕暮れ時、空がオレンジ色に染まる帰り道一人で歩く俺の寂しさは初夏の暑さなんて忘れてしまうほど。
当然ナンパする勇気なんてのはなくて、逆ナンされることもなく、惨めに帰路を辿る。
だがそれを真夏のキューピッドは許さなかった。転機が舞い降りて来たのだ。
というのも急に「いかがですか？」とチラシを渡されたのだった。
もちろん目を向けるつもりなどさらさらなく、素通りするつもりだった。
けれどそんな俺にキューピッドは矢を放った。
吸い込まれるように見てしまったチラシに踊る文句、それは――。
「『リア充育成塾』……？」
思わず声に出して読んでしまう。そしてそのまま足を止めてしまう。
そんな俺にチラシ配りのお姉さんは言う。
「ねえ、君？ 実は彼女もち？」
「えっと……」

ついついの癖で見栄を張ってしまいそうになる。だがここは素直になるべきだと直感が告げる。

「いえ……」

「やっぱり！ でも大丈夫だよ。君ならすぐ彼女なんてできるよ！ ねえ来て見ない？」
願ってもないお誘いだ。

「行きます！」

うまい事乗せられ、よくチラシも読まずに着いて行ってしまった。

そして行った結果受講料として、野口さんを二人取られた瞬間は一瞬詐欺かと疑った。

だけどビルの一階に構えられたそれは入ってみると、極普通の教室となんら変わらなかった。本当の塾っぽい。

ただ年齢層は幅広く高校生らしい身なりの人もいれば、二十代後半くらいの人もいた。

男性は女性と、女性は男性と思い思いに自由に話している様子だった。

俺はどうしていいものかと教室の入り口の所に立っていると、スーツ姿の男性が近づいてきた。

年の頃は二十代後半と言ったところか。

「ようこそ、『リア充育成塾』へ。僕はここの講師をやってます、松村海斗といいます」

「はあ……」

気品あふれる男性の対応に一瞬執事かと錯覚してしまう。

「まずお名前をお伺いしても良いですか？」

「……小金森悠太です」

同じ人間とは思えない爽やかさ百パーセントと、高いコミュニケーション能力に俺は視線を合わせる事すらままならない。

俺はこういう男が嫌いだ。どうせモテるに決まってる。こんな奴非モテ男の敵だ。

しかし相手はこっちの気など知りもせず爽やかさを保ったまま続ける。

「まずナンパの方法から教えてあげようか？」

「……ナンパ？」

やはりこいつは人類の敵だ。俺にナンパする勇気があると思ってるのか？ とんだ節穴野郎だ。

「そうだなあ。成功率が高い口説き文句はやっぱり誕生日ネタかな」

俺は海斗……先生を胡散臭いとでも言いたげに見つめる。

でも先生はやはり爽やかさを絶やさない。その表情に嫌味を一ミリも感じない所がまた悔しいわけだが。

「ケーキを持って今日誕生日なんだ、一緒に祝ってくれないか、これだいたい成功率高いよ」

いやいやその分難易度も高いぞ。

だいたいなんだよそのナルシストな上に図々しさが上乗せされたセリフ。言えるかつ！

「あれ？ ダメ？ 気に入らない？」

俺の顔が相当怪訝そうだったのかようやく爽やかさが崩れる瞬間だった。

目を丸くしている姿は心底驚いているようだ。

俺はこんなのが成功すると思っているこいつの思考回路の方が驚きを覚えるがな。

「まあいいや。君が気に入ろうが気に入らまいがどっちでもいい」

その瞬間本性が現れた。

「どうせナンパする勇気何かなさそうだもんね」

分かっているなら最初からナンパ文句を教えるな。

だが図星故に言い返す言葉など見つからず、口をパクパクさせている俺は完全に負け犬だ。いや、言葉が見つからず口をパクパクする姿は金魚に近いかもしれないが。

結局奴に好意を抱くことなく次の話題へと転換される。

「別にここはナンパとか必要ないしね」

いやほんとなんで教えて来た？

「もし気になる子とかいたら言ってよ。僕が仲立ちしてあげるから」

上から目線な提案にイラッとする。

だが二千元出して入った以上俺だって何の収穫なしに帰る気など毛頭ない。

俺はちらりと海斗先生を睨み、教室全体を見渡した。

年齢問わずの男女が楽しげに喋っている。けれどその中に一人だけ違う子がいた。

誰かと話すでもなく、一番奥の後ろの席に腰かける少女。

頬杖をついて座る姿は何かの絵画かと思わせられる。

制服を着ている所を見ると俺と同じ位の歳か。

その制服に一切の乱れもない。まさしく清楚系美少女。

「あの人……」

ほぼ感嘆に近い声が漏れる。

海斗先生は俺の視線を追い、同じ少女に目を向ける。

「ああ、あの子か。あの子はちょっと特別なんだ」

「特別？」

俺は一端彼女から目を離し、先生の方へ視線を戻した。

「まあ気に入ったなら声かけてあげるよ。ここで待っていて」

俺の視線に応えることなく先生は彼女を見つめたまま口を開く。

そしてゆっくりと彼女に歩み寄って行く。

俺は二人の会話を遠目に見ていた。何話しているかなんて当然聞こえない。

でもとにかく色々な意味で胸がドキドキしていた。例えば彼女はこっちに来てくれるだろうか、とか。例えば、あの先生は余計な事を言っていないだろうか、とか。

今にも心臓が破裂しそうだ。

しかしそんな予想とは裏腹に、彼女は先生の話聞き終えた瞬間こちらに向かって微笑んだのだった。

もう一度言おう。微笑んだのだ。

その笑みと言ったら可愛くてこれはこれで心臓が破裂する勢いだ。

あんなにも美しく可愛い人を俺は見た事がない。

まさしく可憐な花のような笑みとは彼女の笑顔を差す。

そんな可憐な花は崩れることなくゆっくりと俺に近づいて来る。

一歩踏み出すごとに彼女のセミロングまで伸ばされた髪が揺れた。

すごく妖艶で色っぽい。

俺がごくりと生唾を呑み込んだ瞬間彼女は俺の前に到達し、足を止めた。

「初めまして。吉良しおりっていいです。よろしくね」

後ろで手を組み、首を傾げる姿は少女漫画の主人公とかヒロインが飛び出して来たのかと思う。

その上鈴を鳴らしたような可愛らしい声。非の打ちどころがない。

「あの、どうかした？」

「え、あ、いや、なんでもっ！」

まさか見惚れて我を忘れてましたなんて口が裂けても言えない。

「俺、小金森悠太っていいです」

「悠太君かあ。高校生だよな？ 制服着てるもん」

「こ、高校二年っす」

「じゃあ私の一個上なんだあ」

舌つたらずなしゃべり方は甘い音色に聞こえる。

「じゃ、じゃあ吉良さんは高校一年なんだ」

「しおりでいいよ！」

天使の微笑み。見事に俺の恋心は彼女に射抜かれた。

そこに海斗先生が近づいて来る。

「よし、自己紹介も終わったみたいだし、場所を変えようか」

「場所を、変える？」

他の人はこの教室で話しているのに？

言葉の意図が読めない俺はついおうむ返しにしてしまう。

けれど吉良さんは何の疑問も抱いていないようだ。

「そうですね」

笑顔で頷く。

海斗先生はゆっくりと歩き出し、教室を後にした。

その後を吉良さんも追う。

俺だけが状況が読めず、足が止まっていた。

すると吉良さんは振り返り言う。

「どうしたの？ 早く早くー」

まるで遊園地ではしゃぐ彼女が彼氏を急かしているような口調に俺の足は動き出す。

もしその設定が現実だとしたら「分かったって。そんなにはしゃぐなよ」なんて言うのがお決まりなわけで。

想像するだけでドキドキする。

ただ実際はどこに行こうとしているのかすら把握していない。

とりあえず着いて行くと、廊下の先にあるエレベーターに到着した。

そこで海斗先生は上に行くボタンを押して待っている。

「さあ二人とも乗って」

吉良さんが乗り、俺が続けて乗る。

すると先生はボタンを離し、そのままその場に留まった。

「先生は乗らないんですか？」

「はい。ここからは二人の空間ですから。どうぞゆっくり」

意味深な言葉に色々と言いたい事があった。

けれどそれを許さんとするが如くエレベーターのドアが閉まった。

エレベーターという密室空間の中に吉良さんと二人きり何ぞ、俺の理性が保たれるわけがない。

いや実際無理にでも保つわけだが。

吉良さんは特に表情を変えることなく五階のボタンを押した。

俺一人だけがドキドキして、その胸の音が聞こえるんじゃないかとパニックを起こしそうになる。

口から心臓を吐き出しそうだ。

「あの、えっと……これからどこ行くの？」

何とか心臓をあるべき位置に留めたまま言葉だけを吐き出す。

ところが吉良さんは無言だった。ただじっと階の表示だけ見上げている。

「吉良、さん？」

遠慮がちな声に応えたのはチンというエレベーターが五階に到達する音だった。

吉良さんは何も応えぬままエレベーターから降りる。

俺の足は再び金縛りのように動きを止めた。だが扉が閉まりそうだったので何とか降りる。

降りた先にはホテルのような廊下がたたずんでいた。

ふかふかの絨毯が敷かれた足元。いくつかのオートロック式ドア。そのドアには数字

がふられている。

「これって……」

俺の戸惑いはガン無視。吉良さんは奥のドアまで歩いて行くとポケットからカードキーを取り出した。

そのカードキーでドアのロックを解除する。

そして何の躊躇いもなく足を踏み入れる。

俺はそわそわしながらもドアが閉まる前に室内に体を滑り込ませた。

入ってすぐ左手にはシャワールームがあった。

吉良さんはそれを無視して部屋の奥へと進んで行く。

俺も後を追った。

それから息を呑んだ。

いかがわしい照明、やたらとピンクに統一されたカバ一類、何かとハート型した小物……。

これってまさか……。

冷や汗がどっと噴き出す。

こんな所来たのは生まれて初めてだ。

「さて」

ようやく彼女が口を開いた瞬間だった。

彼女は振り返り色っぽい視線で俺を見つめて来る。

リボンを外し、床に落とす。自らの手でそのままYシャツのボタンも一個、二個と外してゆく。

ゆっくりと見え始める豊満な胸は何カップだろう。

俺は視線のやり場に困り、一定に定まらない。

「いくら払ってくれる？」

だが次の瞬間頭を殴られた気がした。

理性を保てるかという限界の狭間にいた俺が、一瞬にして正常を取り戻す。

もうドキドキとかロマンチックなんてものは微塵もない。

「いくら、払ってくれる……とは？」

思わずおうむ返しにする。

彼女は一体何の話をしているのだろうか。

「えっと……小金森君だっけ？」

「え、あ、はい……」

「君さ、童貞でしょ、どうせ」

「っ！」

ずばり指を差されて言われるとさっきとは別な意味で冷や汗が溢れる。

まあ当然否定の余地はないのだけれども。どうせ彼女なんてそもそもいたことない

し？

だが現在の状況でその事実はどうでもいい。……いやよくはないんだけど。

それより今は彼女の発言に問題がある。

「まあ別に童貞なのはいいんだけど……そうだな、最低二千元。本当は五千元くらい取ってやりたいけど学生にそれは酷すぎかな」

吉良さんはいやらしい笑みを貼り付ける。

何もかもが違う。下の教室で清楚系として微笑む彼女とはまるで別人だ。

俺の頭はフル稼働していたけれど着いていけなかった。

「待って何の話？ 君はさっきから……」

「何の話って決まってるでしょ。この状況見て分からないはずないじゃない」

少し声に色っぽさが欠ける。その代りに苛立ちが僅かに滲んだ。

「いや俺別に……」

「やりたいんでしょ？ 童貞卒業したいんでしょ？ だから二千元でやらせてあげるって言ってるの」

完全に苛立っている。もう誘っているような妖艶で色っぽい声も目付きもなく、ただうんざりした表情が俺を見つめた。

「あーもうこれだから童貞は」

吉良さんは髪を掻き上げる。

「こんな美少女に誘われてもやる勇気がないって言うか、意気地なしって言うか……ほんとめんどくさい」

彼女はベッドに腰かけた。教室で椅子に腰かける吉良しおりとは別な人間が目の前で足を組む。

「ほら、やりたいならさっさとこっちに来なさいよ」

彼女は鬱陶しそうに残りのボタンも外し始めた。

その瞬間俺の中で色んなものが弾ける。

「……ちがあああああああああああああああああああああああああああああう！」

そして気がついたら獣の咆哮に似た叫びを上げていた。

さすがにそれに驚いた吉良さんもボタンを外す手を止め、俺をまじまじと見つめる。

「違う違う違う！ 貴様は色々と間違っている！」

「はあ？」

俺はびしっと彼女を指差し叫んだ。

「いいか、俺は貴様のような詐欺師に童貞を捧げるほど安い男じゃないぞ！」

「え、キモ。何その女みたいなセリフ。それも私詐欺師じゃないし」

どう見てもドン引かれたわけだが、この際どうでもいい。もう言わなければこれは治まりきらない。

「いいや詐欺師だ。あんな可愛い清楚系に見せかけて部屋に連れ込んだらやらせるから金を出せだと？ これのどこが詐欺じゃないんだよ！」

「可愛い清楚系とか勝手に思い込んだのはそっちでしょ！」

「ああそうだ。勝手に思い込んでたさ」

「ほら。あんたが」

「だからな！」

吉良さんの言葉を遮り熱弁する。

「だからな、もしこういう状況になった時に想定してたのはもっとロマンチックでドキドキで初な感じなんだよ！」

「はあ？」

いやたぶんこの辺の話は相手が吉良さんじゃなくてもドン引きされていたかもしれない。

だがそんな事知るかつ！ 開き直った童貞ほど無敵なモノはない！

「いいか。まず俺がベッドの上に吉良さんを押し倒すんだよ。そして互いに頬を赤らめながら視線を合わせる事すらままならないんだ」

「……………」

「それでも俺が本当に良いのかと尋ねると吉良さんは小さく蚊の鳴くような声でうんつて言うんだよ」

「ありえないから」

どんな突っ込みを入れられようと今の俺は無視する事をここに宣言する。

「そしたら俺がゆっくりとリボンを外し、第一ボタンを外す。その間二人の心臓は互いに聞こえてしまいそうなほど高鳴ってるんだ」

「どんだけ頭の中お花畑なわけ」

「それから俺は吉良さんの首筋にキスをして……って言うのが俺の筋書きなんだよ！分かるか！」

「いや分かんないしひたすらキモい」

容赦ない暴言が胸を突き刺してくる。だが今の俺はマリオがスターを手に入れた時のように無敵だ。痛くも痒くもない。

「これがな童貞の夢なんだよ！ それを貴様はぶち壊した！ 自らボタン外す奴があるかつ！」

「はあ！？」

さすがに彼女もブチ切れたようで立ち上がり詰めよって来る。

「だからそれは全部あんたが勝手に抱いた妄想でしょ！ 押し付けないでよ！ 最低！」

「ああ最低だよ」

自分でもかつて聞いた事のない低い声が響く。

その声に吉良さんは戸惑いを見せ、一步後ろに下がった。

「だけどな……」

じっと吉良さんを見つめる。そしてはっきり告げた。

「だけど自分を大切にできないお前はもっと最低だよ」

「っ！」

息を呑む音が室内に大きく響いた。

いかがわしいライトに照らされた吉良さんの顔は青白く、歪んでいる。

「確かによく知りもしないで見た目だけでこういう人なんじゃないかと想像して、それを押し付けて絶望するのは俺が悪いと思う」

一端言葉を切る。

「だけど俺が一番絶望したのは性格のギャップじゃない。吉良さんが自身を大事にしてないことだよ」

「っ……」

吉良さんはずっと俺から視線を外し、俯いた。

「……何も知らない癖に偉そうなこと言わないでよ！」

だらんと下がった腕は両方とも拳を握り、怒りで震えていた。

「お前みたいな奴にそんな事言われたくない！」

吉良さんは顔を上げ、俺を睨みつけた。

その目には涙が浮かび、綺麗な顔を今にも汚そうとしていた。

ただまだ辛うじて涙は流れてはいない。

そんな彼女に俺は、笑った。

「何も知るわけないよ」

その一言は彼女の堪忍袋の緒を切った。

でも怒りの言葉を発する前に俺は続けた。

「だって俺達、会ったの今日だよ。逆に知ってたら怖くね？」

「うるさいもう黙れ出て」

「だからさ、これから教えてよ」

本日何度目か吉良さんの言葉を遮ってしゃべる。

すると吉良さんは驚いたように言いかけた言葉を呑み込み、ぽかんとした顔で俺を見つめた。

その顔には「何言ってんのこいつ」と刻まれている。

「いや普通カップルってそういうもんでしょ？」

「何の話？」

「互いに好奇心を持って互いを知りたくなるからデートとかするわけでしょ？ だから俺達もデートから始めよう！」

「いみ、わかんない」

ついに彼女の目からは涙がこぼれ、溢れて頬を伝った。
マスカラとアイライナーで黒く霞んだ涙は頬を伝い顎を滴る。それは音もなく床で弾けた。

「意味分かんない。何なのあんた」

俺は彼女に近づき手で涙を拭ってやる。

「何ってただの高校二年生の童貞男子だけど」

「ほんと……わけ分かんない奴」

「だから分かんなくて良いんだって。これから分かって行くんだから」

「……別にあんたを彼氏にするなんて言ってない」

彼女はそう毒づいた。

だけど俺が笑いかけると、苦笑交じりではあるけれど、彼女も笑った。

そこから俺はボタンを閉めてやり、吉良さんが落ち着くのを待った。

ようやく落ち着いて涙が止まった頃には既に八時を回っていた。

でもその分吉良さんの顔はだいぶすっきりとしていて素顔が露わになった。

メイクが落ちても睫毛の長さや肌の白さは健全だ。

あえて言うなら幼くなって高校生らしさが窺えるようになった、ということくらいか。

そんな彼女はメイク直しをしたいと言ったが俺が許さなかった。

素のままで十分だ。

何とか説得し、俺達は再びエレベーターで一階まで下りた。

教室は既に受講生はいなく、海斗先生だけが一人残っていた。

座ってスマートフォンをいじっていたが、俺達に気がつくとポケットに閉まって立ち上がった。

「お疲れさまでした。どうでした、二人きりの一時は」

いやらしい笑みとねっとりした喋り方は不快感を覚える。

そもそも彼女をあんな辛い目に合わせたのはこいつなんじゃないか？

憶測による妄想が広がり睨みつけてしまう。

すると先生は少し驚いたように目を見開いた。

「あれ、お気に召しませんでした？」

きょとんとした声に怒りを覚えた。

「気にいる気に入らないじゃねえ。お前は女子を、女の子を何だと思ってんだよ！ 女の子ってのはなあ！」

俺は先生に噛みつくように怒鳴りかけ、熱弁しかけた。

それを吉良さんがずっと俺の前に手を出し制止した。

とどめに

「あなたは少し黙っていて」

冷たく一言を言われ出鼻をくじかれる。

そしてお口はミッフィにする。

「海斗さん」

吉良さんは海斗先生に歩み寄り口を開いた。

真っ直ぐと真剣な瞳が先生を直視する。

「このバイト、もうやめても、いいですか？」

やはりこいつの差し金だったか。

俺はキッと奴を睨む。

ところが奴は完全に俺を無視して肩を竦めた。

「おや、まさかそのヘタレ君に惚れちゃった？」

さりげなく失礼な事を言われたがここはミッフィを貫き通す。

「いや惚れるわけないじゃないですか」

あれっ？

「でも……大切な事教えてくれたんです」

「大切な事、ねえ」

「海斗さんには本当に感謝しています。だから……」

「はあ……」

海斗先生は溜息一つ吐いて腰に手をあてた。

「居場所が見つかったんだ。止める理由なんかないよ。そもそもここはそうやってリア充を作るための塾だ」

「海斗さん……」

「さ、もう帰った方がいいんじゃないか？ 外は真っ暗だ」

「……今までありがとうございました！」

吉良さんは深々と海斗先生に頭を下げた。

それを海斗先生は温かい目で見つめる。

「えっと……小金森君だっけ？」

その温かい視線は鋭い視線になって俺に向けられる。

「僕の可愛い教え子、泣かせたら承知しないよ？」

「っ！」

お前が言うなという突っ込みもあつたがそれ以上に何か全身を這った。

ぞわっとする何か。

それは声のせい、視線のせい。感覚としては蛇に睨まれたカエル、という感じか。

「さ、吉良さん頭を上げて。その間抜け面に送ってもらおうと良い。どんなヘタレでも一人よりはマシだ」

吉良さんはゆっくりと頭を上げもう一度海斗先生をじっと見つめた。

そこに流れた空気は俺には入れない穏やかな空気だった。

少しして吉良さんはその空気を破り出て来るように踵を返した。
歩き出し、俺の隣を無言で通り過ぎた。
俺は僅かな時間、海斗先生を見つめた。
すると海斗先生も俺を見つめ返して来た。
その表情が示すのは何だただろうか。二人の関係が分からない俺には伝わらない。
だけど憶測で言うなれば責任委託、だと思ふ。
でも結局確かめることもなく吉良さんが
「早く帰るよ」
と言ってきたので、俺は一礼してその場を後にしたのだった。

外は既に暗く月が煌々と輝いていた。星もまばらに散りばめられ、俺達を見下ろしている。
初夏に値する今日この頃は風が吹いても心地良いくらいで気温はちょうど良かった。
そんな非のない情景を俺と吉良さんは無言で歩いた。
本当は何か話さなければと一人焦っていたけれど、何を話して良いか分からなかった。

もちろん海斗先生との関係を聞きたかったけれど、あまり野暮な事をして彼女を傷つけたくはなかった。

「海斗さんはさ」

結局彼女から唐突に口を開いたのだった。

「私が中学二年の時にね、ナンパされて嫌がってる所助けてくれたんだよ」

懐かしむような声は何か昔話でも語ろうとしている気がした。

「それをきっかけに海斗さんと仲良くなってさ、私海斗さんに惚れたの」

大事な宝物にそっと触れるような口調はどこか寂しい。

「でも海斗さんああ見えて奥さんいるんだよ」

「え、そうなの？」

確かにいてもおかしくはない年齢かもしれないが。

「それが結構ショックでさ。重いと思うかもしれないけど、それから色んな事がどうでもなくなったんだ」

彼女は空を仰いだ。

「まあちょうどお金もなかったし、それで体売り始めたんだ」

軽い調子で言うけれど本当はその心の傷は想像を遥かに超える深さなのだろう。

その深さは俺には到底計り知れない。

「だけどその時海斗さんはあんたと同じように怒ってくれたんだ。自分をもっと大切にしろって」

今度は足元を見つめる彼女に素直な質問をぶつける。

「じゃあ何でその時に辞めなかったんだよ？」

「うーん、子供だったし、構って欲しかったのかも」

自嘲が入る。

「海斗さんに構って欲しくて仕方なかったんだよ。実際海斗さんは私をほおっておかなかったし」

彼女は一端言葉を切ってさらに続けた。

「せめてうちの塾に来て言ってさ、塾に連れて来てくれたの。だけど分からず屋の私はさ、海斗さんに自らお願いしたの」

「吉良さんと話したいって言った男がいたら上の部屋に連れ込め、と」

「そう」

「それってやっぱり」

「だけどね」

今回は俺の言葉が吉良さんによって遮られた。

「だけど海斗さんは誰構わず私と誰かを部屋に案内したりしなかったのよ」

「え……？」

「ちゃんと人を見てあの教室で三人で話すか、部屋に行くか分けてた」

じゃあ海斗先生は俺を見極めて部屋に連れ込んだというのか。

「三人で話した日は私が稼げないからって三千円くれてたなあ」

「そう、だったんだ」

「うん。ていうかね、あの塾に週一くらいですっと通ってたけど三千円ばっかだったよ」

「……ん？」

俺は思わず足を止めた。

今の言葉の裏に隠された意味、それは――。

彼女も足を止め、振り返る。

「もはや小金森悠太、君が初めてだったんじゃないかな」

「っ！」

月光に照らされ微笑む彼女は、美しく妖艶だ。

「海斗さんは君を見た瞬間から気がついたのかもしれないね」

夏風が彼女の髪を靡かせる。何だかドラマのワンシーンでも撮影しているような気分だった。

「だから私正直驚いたな。部屋に連れて行かれたことも。君が昔の海斗さんのように怒ったことも」

そう言ってくすくす笑う彼女は再び前を向いて歩き出す。

俺は急いで後を追った。

「あの部屋私も初めて入ったけどさ、ちょっと悪趣味だったと思わない？」

冗談っぽく言う。

俺は黙って隣を歩いた。

歩く靴の音だけが夜の空に響く。

彼女は一体どんな想いであいつの元に通い続けたのだろうか。

そして海斗先生はどこまで気がついていただろうか。

俺は唇を噛みしめた。

「あ、ここ。ここが私の家」

吉良さんは足を止め、ある一軒家を指差した。

何の変哲もない極普通の家だ。

「今日はありがとね」

そう言って笑う彼女をじっと見据え、紡ぐ。

「俺、絶対吉良さん幸せにする！」

「え、何急に。キモっ」

「俺達がやる時はドキドキで互いが頬を赤らめるんだ！」

「いや今のあんた十分顔赤いよ」

「っ！」

そりゃこんな事今まで言った事ないし、顔から火が出そうなのは事実だけどもっ！

「と、とにかくその時まで俺の童貞は誰にもやらん！」

「いや何の宣言？」

「いいから！ じゃあな」

そう言って俺が踵を返した瞬間吉良さんは俺を呼びとめた。

「ちょっと？」

俺は即座に振り返る。これもしかして「幸せにしてみなさい」とか、「期待してる」とか、そういう類の一言を言われるんじゃないか。

そんな期待の視線を送る。

だがその視線に応えるのは呆れたような目である。

彼女の手にはスマートフォンが握られていた。

「幸せにするってあんたさ、今後どうやって連絡取るつもりなの？」

「あっ……」

「家まで来てストーカー紛いの事されても困るんだよね」

俺としたことが連絡先を聞くという今後の発展につながる手段を忘れていた。

「えっと、あの……連絡先を教えてください」

もう恥かし過ぎて死にたいレベルに達した。

俺は吉良さんの事をまともに見る事すらできない。

そんな俺に溜息一つ歩み寄ってくる。

そして俺達は無言で連絡先を交換したのだった。

「じゃ、気をつけてね」

交換が終わると彼女はさっさと家の中に入ってしまった。
この瞬間ほど自分のカッコ悪さを呪った事はない。
俺は自分を呪い殺したい思いで帰路を辿る。
するとスマートフォンが鳴った。
ああ、帰りを催促する母親か、なんて憂鬱な思いで画面を見る。
だけど違った。
たった今別れたばかりの吉良さんからだった。
たった一言。
「幸せにしてくれなきゃ海斗さんに言いつけるから」
冷たいような気がしなくもないが、今はこれで良い。
これで十分だ。
俺は星が散りばめられた空を見上げた。
美人は三日で飽きるけどブスは三日で慣れる、なんて言葉がある。
断言しよう。嘘だ。付き合うなら美人が良いに決まってる。
一に顔、二にバスト、三に太もも、四にくびれで五に性格。
恋愛する上で基本だ。
けどどんなにこれが当てはまろうと形だけのリア充なんて絶対に嫌だ。
付き合っているように見えるだけのリア充なんてごめんだ。
リア充になるならちゃんと恋したリア充になる。
それが俺のモットーだ。
俺は「了解」と短く打ってスマートフォンをポケットにしまい、帰路を歩き始めた。

Copyright(C) Jikei Group. All Right Reserved.

当サイトに掲載されている全ての画像・文章の無断転載・転用を禁止します。